人のいる風景 people

渡辺 由香理さん

わたなべ・ゆかり

世界大会３部門制覇を成し遂げた選手の思い
「自分自身の壁を乗り越えることができた特別なメダル」

20世紀初頭、アメリカの音楽隊によるパレードの指揮者が指揮杖を回すことから始まったといわれる国際競技《バトントワーリング》。

渡辺 由香理さんは、今年８月に東ヨーロッパのクロアチアで開催されたWBTF（世界バトントワーリング連合）インターナショナルカップにおいて、スリーバトン・アダルト部門の栄えある世界第１位のメダルを獲得しました。

同大会では、平成19年のジュニア部門、21年のシニア部門に続く優勝で、全３部門制覇の快挙を成し遂げたことになります。今回は、渡辺さんを陰ながら支えた家族の一人、祖母の谷口 リヱさんと一緒に、取材に応じていただきました。

●いつからバトンを始めましたか

「千歳生まれですが、父親の転勤で青森県にいた４歳のころから、２歳年上の姉の影響を受けてバトンを始めました。その後、秋田県に転居し、小５で千歳に戻りました。東北と違い道内では馴染みの薄いスポーツですが、バトンは手放しませんでした。

日本各地での大会や世界大会では、自分でもいい成績を残せたという自負はありますが、こうして続けてこれたのは、家族みんなが支えてくれたからだと感謝しています。」

●競技衣装（レオタード）はおばあちゃんの手作りだそうですね

「おばあちゃんは、洋装店を経営していて、お店が忙しいときでも、合間をみては、私のために衣装を作ってくれました。市販品を用意することもありますが、私が気に入らないと、いつもお直しをしてくれます。

おばあちゃんが手をかけてくれた衣装はみな、着心地の良さはもちろん、魅力的で、世界中の選手がどんなにきらびやかな姿で集まっても、《自分が一番いい衣装を着ている！》と、自信を持って競技に臨めます。」

●これまでのバトンで苦労したことは

「実は、大会での優勝は今回が８年ぶり、表彰台にすら上がれなかった時もあります。自分にはもう無理なのかなあって、ずっと悩んでいました。家族にも歯がゆい思いをさせていたと思います。

でも、あきらめきれなかった。《周りを気にしていると、いい成績は出せない》のだと自分に言い聞かせて、《何事も前向きに考えよう》《大好きなバトンを楽しもう》と意識して思うように努力しました。正直なところ、今回のメダル獲得のときはホッとしたという気持ちで一杯でしたが、今、メダルを見ると、自分自身の壁を乗り越えた証という、特別な思いが映り込みます。」

●今後のバトン人生は

「道内ではバトンをしている方の数は少ないと思います。子どものころに始めるだけではなく、40歳の方でも、70歳の方でも楽しんでもらいたい。もっとバトンが身近なスポーツになるよう、PRしていきたいと思っていますし、自分の視野を広げて、《選手として》だけではないバトン人生を、探し求めていきたいですね。」

取材の間、隣で渡辺さんを温かく見守っていた祖母の谷口さんは92歳。今年、60年以上続けた洋装店をたたんだそうです。

内容は違っても、一つの生き方を自信を持って続けられる力強さは、凛とした姿と清らかな笑顔のように、しっかり、孫へと受け継がれているのかもしれません。

世界大会での演技

▲ 全部門の３つ揃った優勝メダルと、祖母（谷口リヱさん）が型から刺繍までを手がけた真っ青なレオタード。

プロフィール

■渡辺 由香理（わたなべ ゆかり）さん／バトンインストラクター／国内外を問わず、スリーバトンの種目で数多くの優秀な成績を修める。／平成19年に市体育協会スポーツ賞受賞／19年、21年の日本ハムファイターズの優勝記念パレードでは先導を務める。